

没後 220 年 画游人・若冲 —光琳・応挙・蕭白とともに—

岡田美術館（箱根・小涌谷） 2020. 10. 04～2021. 03. 28



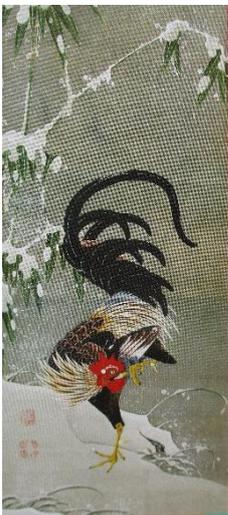
いとうじゃくちゅう
「伊藤若冲」(1716～1800)

は、江戸時代半ばに京都で活躍した絵師で、裕福な商家の長男として生まれながら、名利には全く関心がなく、学問・諸芸・娯楽など

を好まず、ただ絵を描くことを楽しみとして心力を尽くし、まさに「画游人」として当時では稀な 85 歳の長寿を全うした。

本展は、当美術館に収蔵されている「若冲の作品 7 件」を一挙に展示するもので、「着色画」は、「雪中雄鶏図」：雪中の雄鶏が振り向く一瞬を捉えた作品や、「孔雀鳳凰図」：松に囲まれた鳳凰と清雅の白孔雀、「梅花小禽図」：メジロが憩う早春の風景などの豊かな色彩で描かれた作品、「花卉雄鶏図」である。

伊藤若冲 せつちゅうゆうけいす 《雪中雄鶏図》 18 世紀後半・江戸時代中期



京都で活躍した絵師「若冲」が、庭の写生に励み雪の中で餌を探す鶏の朱の鶏冠や渋黒の尾羽が鮮やかに映える“雪中の雄鶏が振り向いた緊張の瞬間を描いた作品”は、鶏の羽の重なり具合や足の描写にはかなり迫力がある。

一方、背景の雪をかぶった竹や菊は、不思議な感覚でとらえられている。溶けた雪がまた固まったような奇妙な雪の連なりジグザグに折れ曲がった竹という、従来にはない独自の世界が描かれている。こうした非現実的な自然景と写実的な動物や植物の織りなす独特の表現は、後に精緻を極め、江戸絵画の中でも比類のない幻想的な作風を完成させた作品であるとされている。

また、墨一色で描かれた「水墨画」は、奇抜な構図の「月に吠々鳥図」やユーモア溢れる「三十六歌仙図屏風」に「笠に鶏図」の「3点」で、画伯の表現の豊かさと変遷を辿ることができる。

更に「若冲」の一時代前の絵師で手本とした狩野派や「尾形光琳」、光琳の弟「尾形乾山」、同時代の京都画壇の覇者「円山応挙」、鬼才ぶりが注目される「曾我蕭白」らの作品と併せ、江戸時代の多彩な絵画を楽しむことができる。